多摩デポ通信 第67号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2024年4月21日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一-三一-一八

●HP／https://www.tamadepo.org/

●E-Mail office@tamadepo.org

2024年度 通常総会開催のご案内

理事長　座間直壮

今年の年明けは能登地方を地震が襲い、甚大な被害をもたらしました。四か月経ちますが復旧作業は今も続き、日常生活に大きな支障をきたしています。その後も列島の随所で地震に見舞われ、私たちは日頃の備えについて真剣に考えなければなりません。

図書館も例外ではありません。共同保存はこの意味からも取り組むべき課題であると思っています。

多摩デポはNPO法人として活動を始め、今年で17年を迎えます。多摩地域の図書館と連携し共同保存の実現を目指して活動してきました。リアルな共同保存図書館の実現には至りませんが、資料保存の重要性を伝え、共同保存の準備ともなる様々な取り組みを行ってきました。今年度も重点課題をかかげ、力強い活動をすすめていきたいと計画しています。

今年度の通常総会は日曜ではなく、5月18日(土)に東京都公文書館研修室(JR西国分寺駅下車)で開催します。コロナ対策を採りながらリアルの総会として行う予定です。皆さんと一堂に会し、昨年度の事業を振り返り、今年度取り組みたい計画を一緒に考えていきたいと思っています。ご参集をお願いいたします。

総会記念講演会は、昨年度は国立国会図書館の蔵書デジタル化と個人向け配信事業を取り上げましたが、今回は元国立国会図書館副館長の田中久徳氏をお招きします。「公共図書館の未来と国立国会図書館の役割―デジタル時代の相互連携に向けて―」と題した講演をしていただきます。

国立国会図書館からの視点で、公共図書館の評価や期待、同館の事業との関係などをお聞きするのは大変珍しい機会だと思います。

同館の理念や歴史、それに照らした現状にもふれ、目覚ましい取り組みを続ける最近の同館の活動を踏まえる時、見えてくる公共図書館の潜在力や可能性などを一緒に考えていきたいと思います。講演は会員以外の方も聞いていただけます。ぜひご参加ください。

2024年度通常総会

5月18日（土）午後2時～3時

東京都公文書館研修室

終了後、同室で総会記念講演会

「公共図書館の未来と国立国会図書館の役割

―デジタル時代の相互連携に向けて―」

講師：田中久徳氏

第42回多摩デポ講座

保存に力を注ぐ港区芝の二つの図書館を見学する一日
……三康図書館とＢＩＣライブラリ見学報告

3月8日（金）、意欲的な事業展開や熱心な紹介活動で最近話題の二つの図書館の見学会を行った。参加者は9人だった。

三康図書館は、ほとんど公共図書館がなかった明治35年に、当時の大出版社の博文館の社主が作った私立公共図書館＝大橋図書館の蔵書を保存、公開している。芝の増上寺の土地の一角に施設があり、西武鉄道が出資を続けている。戦後の昭和28年に廃館した大橋図書館の蔵書が引き継がれ、この図書館が立ち上がっていった経緯も興味深い。

「公共図書館の源流」と言われる大橋図書館とはどんな事業をしていたのか、蔵書はどうだったか。書庫内の各所に用意されている小展示も使いながら丁寧な説明を受けた。難しい本が多いのかと思っていたら、実用書を大事にし、旅行案内や学習参考書もある。雑誌もある。二十世紀前半までの、いわば二世代・三世代も前の公共図書館蔵書が丁寧に保存され、それが時代を経ると貴重になっている様子には、想像力をかきたてられた。「一人で来て、書庫の本をゆっくり見たい」という感想を聞いた。

ＢＩＣライブラリは、（一財）機械振興協会が運営する機械産業とビジネス資料の図書館。フロアを案内してもらい、特定分野の専門図書館という性格を、蔵書、運営基盤、利用者対応などから教わった。置かれた超高価な参考図書や他では見たことのない雑誌、広報誌類が面白かった。同館は閉館した「自動車図書館」の蔵書を引き取り、「くるまコレクション」として組み入れ公開を始めている。これは、産業人でなくても見に来るクルマ愛好家がいるだろうと思った。

同館はこれまでにも様々な専門図書館の関連資料を引き取り、散逸させずにかたまりで残してきた。状況に即応する図書館や職員の姿勢も興味深い。専門図書館を業界の利用者ばかりでない人にも開いていこうという意志も強く感じた。

両館とも、定型的業務に留まらない情熱と行動力を持った職員の方が説明してくれ、一般の公共図書館にはない様々な刺激を受け取ることができた。東京タワーをはさんだ両側にあり、都心には珍しい広々とした視界の地。個人で行っても見学や利用が可能なので、興味のある方はホームページをご覧ください。

街ににぎわいが戻った。コロナ感染症の沈静化の下、２０２３年度はリアルに集まる多摩デポ講座を再開しようとしてきた。講演会も見学会もどちらも始める計画だったが、講演会は適当な企画が選べず、見学会ばかりを行ってきた。どの回も企画はよかったのではないかと思う。参加は少人数ずつだったが、参加した方には、そのことで「充分見られた」と好評だった。

（事務局　堀）

なお、会員の市民の方に感想を書いていただいたので掲載します。

三康図書館＆ＢＩＣライブラリ見学記

岩﨑正博

まず、これまで、実に様々な図書館および個人ではなかなか見ることが出来ないその書庫等を説明付きで見学させていただく機会を与えてくださった多摩デポの方々にお礼申しあげます。

わたしのような図書館とは関係のない門外漢ながら、個人として図書館に関心を持っている素人にとって、これまでの見学はとても有益かつ楽しいものでした。

そして、３月８日に体験させていただいた２つの専門図書館の見学と職員の方のお話もまた、図書館運営とビジネス意識という面で驚きの多い見学でした。

驚きの一つ目は、両図書館とも入館者の書庫への入庫や見学を積極的に受入・奨励していることでした。そして「我が図書館の書庫にはこんな本があります よ」という書庫の広報活動をとても積極的に行っておられることでした。三康図書館では、閲覧室の書架を「本を配架する場」としてではなく、「書庫の本の広報の場」として使っておられ、その「発想の柔らかさ」に驚かされました。

両図書館のこのような活動は、わたしの持っている「図書館の書庫へのイメージ」、すなわち「書庫に部外者を入れるなんてとんでもない」「図書館の最大の財産である書籍や資料に傷がついたり、整理配架を乱されたりしたらどうするんだ」という「書庫に図書館関係者以外は入れない」というイメージを覆すものでした。

妙な例えですが、両図書館の「図書館はサービス業、利用者は顧客、本や資料やレファレンスは有形無形の顧客向け販売商財・サービス」であり、「使ってもらって商売になる」というビジネス意識が新鮮でした。職員の方が「本に動いてもらうのが大事で、そのために色々工夫している」という言葉が印象に残っています。

二つ目は、自館の特徴、いわば図書館の持つ対外競争力の「見える化」に積極的に取り組んでおられることでした。書庫の本や資料を「見える化」して紹介していることや、自館特有の書籍や資料を、会場を自館としたセミナーで紹介し、顧客を呼び込み、さらに再訪してもらうという「リピーター作りの工夫」を展開なさっておられることが印象に残っています。

三つ目は、他館とのネットワークを積極的に構築していることでした。他館での検索を通じて、「あそこに該当する書籍や資料がある」「あそこにはあんな資料があるんだ」という、いわばネットを利用した「口コミ効果」を醸成して、自館の広報に積極的に取り組んでおられました。

今回の見学では、それ以外にも、すごしやすくカジュアルな閲覧室づくり、書籍や資料の保管・保存の工夫や苦労、カビや虫等を防ぐ書庫の環境作りへの努力、収集と保管の財政的バランスのご苦労等様々なお話をうかがわせていただきながら、その現場を見せていただきました。

最後になりますが、ご対応いただいた両図書館の方々にお礼を申し上げます。

２０２２年都道府県立図書館の「県」域内市町村立図書館への図書資料の保存の取組
―図書館ホームページから

鬼倉正敏（事務局）

１　はじめに

『多摩デポ通信』第62号（2023.2.25発行）で、それまでに調べていた都道府県立図書館の県域内市町村立図書館への図書資料の保存の取組を掲載した。

それに続き今回は２０２３年度後半に、都道府県立図書館（以下「県」と略。また、各図書館の都府県・図書館の表記は略）のホームページを閲覧し、計画や２０２２年度の実績等を調べた。一部、それ以前の内容もある。また『２０１９（令和元）年度公立図書館における蔵書構成・管理に関する報告書』２０２０年全国公共図書館協議会」も参考にした。

２　取組を行っている「県」

２０２２年に取組を行っている埼玉、富山、愛知、三重、滋賀、京都、岡山に北海道を追加した。理由は北海道の項参照。

北海道

北海道は、収集方針に「市町村立図書館等の求めに応じて、それらの館で収集した資料の一部を譲り受け、保存し、利用に供する」とあったが、実績が確認できず、していないと判断していた。前年の調査を纏めたところ、先進事例として多摩デポに北海道図書館振興協議会調査研究チームから問い合わせがあった（『多摩デポ通信』第62号掲載）。２０２３年３月に、その研究チームにより『資料を護り、未来の利用者へ残すために～資料の共同保存と除籍を考える～（調査研究報告書）』が発行され、その中に「除籍する資料で道立図書館にないものについての問い合わせを受け、寄贈いただく例もあります」とあり、それに続く記述からも寄贈を受けることがあると判断した。

埼玉

埼玉県図書館協会公共図書館部会加入館で、「県」が埼玉版ISBN総合目録から単館所蔵データを県域内に周知し、各館での分担保存を行っている。

『令和５年度要覧』（2023年７月発行）、対象機関113（館・機関・県立）、対象冊数500,443冊、（2021年度115機関、485,162冊）。

『埼玉県立図書館創立百周年記念誌』埼玉県立熊谷図書館が２０２２年12月に発行。その第２篇 協力と連携の第２章 埼玉県図書館協会で、右の取組が記載されている。

富山

『富山県立図書館年報令和５年度』（2023年６月発行）で令和４［2022］年度資料収集の概況で「寄贈図書には、町立上市図書館や氷見市立図書館、高岡市立福岡図書館等の除籍図書183冊が含まれ、うち138冊は資料センター収蔵図書として受け入れた。」

（2021年度 滑川市立図書館や町立上市図書館等の除籍図書62冊が含まれ、うち19冊、2020年度 氷見市立図書館や町立上市図書館等の除籍図書248冊のうち

81冊、2019年度　砺波市立図書館や町立上市図書館等の除籍図書397冊のうち251冊)

年度	2019	2020	2021	2022
寄贈計(A)	4,107	3,353	3,521	3,094
(A)の内、他自治体が除籍(B)	397	248	62	183
(B)の内、資料センター収蔵へ	251	81	19	138

愛知

『事業年報　２０２３年度』(2023年11月発行)であいちラストワン・プロジェクト「２０２２年度は、市町村立図書館において保存が困難とされた1,392冊の希少図書の県図書館への搬入を許可し、順次整理」(21年度2,763冊、20年度2,833冊、19年度1,248冊)

『第二期愛知県図書館の基本的な運営方針(2023-2027)～県民の「もっと知りたい」に応える知の交流拠点を目指して～』(2023年3月発行)で市町村立図書館等への支援として「あいちラストワン・プロジェクト」の運用継続を記載している。

年度	冊数
2022	1,392
2021	2,763
2020	2,833
2019	1,248

ところが、２０２３年８月24日、『読売新聞オンライン』に「「最後の一冊」特定し保存、あと1万冊分の本棚は近く満杯…あいちラストワン・プロジェクト」と記事の見出しが出された。「14～22年度の9年間で、５２５１冊を受け入れた。」「移管希望が急増。21、22年度は５０００冊を上回る希望が寄せられ」「プロジェクトのための本棚はあと約1万冊分で、このままでは近い将来、満杯になる見通し」「今後は、国立国会図書館でデジタル化された書籍を対象外にするなど保存基準を見直し」等の対策と報じられた。

三重

『図書館概要　令和５年度』(2023年5月発行)では取組の実績は確認できないが、『三重県立図書館改革実行計画「だれにも図書館」令和５年度アクションプログラム』に「書庫の配置見直し」として、「令和5年度の目標：配本資料の一部処分、処分対象とする配本・書庫資料の選定〔令和６年度の目標：書庫資料の除籍と配置見直しによる書庫の所蔵スペースの拡大〕※令和４年度当初「児童資料、地域資料の所蔵場所を拡大する」から変更」とある。

滋賀

『令和５年度滋賀県立図書館事業概要』(2023年９月発行)から、資料保存センター機能、市町立図書館の除籍図書移管からの受入721冊(21年度1,422冊、20年度1,174冊、19年度1,639冊)

年度	冊数
2022	721
2021	1,422
2020	1,174
2019	1,639

京都

『事業概要（令和４年度のまとめ)』(2023年10月発行)では取組の実績は確認できない。『京都府立図書館

サービス計画（令和３年度～令和７年度）』（2021 年３月策定）（前年だが、前回未記載のため）に、「十分な収蔵空間の確保による資料の適正な保存」として「市町村立図書館が所蔵する貴重な資料についても連携して保存に努めます。」「市町村立図書館と連携して府内１冊所蔵図書の的確な把握と保存に取り組みます。」とある。

岡山

『令和４年度年報』（2023 年８月発行）では取組の実績は確認できないが、「令和４年度基本方針及び重点事項・組織概要」として、「資料保存センターとしての図書館」として「全ての県民が共有する知的財産として図書館資料を収集、整理、保存し、後世に継承する。県内公共図書館等から移管資料を受け入れ、県域における永続的活用を図る。」とある。

３　計画にある「県」

新館計画で保存に位置付けた千葉、静岡のほか宮城、福島、福井が計画で取り上げているがその計画の実績は確認できない。

宮城

『第４期宮城県図書館振興基本計画（令和５年度～令和９年度）』2023 年３月策定の「施策の方向性」の「幅広い資料の収集と適切な保管」に「これまで取り組んできた「県内最後の１冊」の保存の在り方を含め，「図書館のための図書館」として市町村図書館等に対する資料保存センターの役割や、資料を適切に保存するための書庫の確保についても検討していきます。」とあるが、「主な取組」に位置付けられていない。その検討結果は確認できない。

なお、同計画前期平成30年度～平成34年度、前々期平成25年度～平成29年度に、同内容の文言があった。

福島

『福島県立図書館要覧２０２３（令和５年）』に「令和５年度重点項目」として「市町村（図書館・公民館等）を支える図書館」であるために」に「資料保存のための分担やデポジットライブラリーに関する他県の状況等を調査します。」とあるが調査結果は把握できない。

なお令和４年度重点項目に、初出の同文があった。

千葉

『要覧　令和５年度』（2023 年６月発行）の「Ⅰ千葉県立図書館運営方針」における「千葉県立図書館行動計画（令和３～５年度）進捗状況（令和５年３月末現在）」で、主な取組として、県内最後の１冊保存体制の検討スケジュールを 2021～2023 年とし、「課題等について市町村立図書館等と情報交換を進め、県内の保存体制のモデル案を検討する」「市町村立図書館等が最後の１冊を確認できるよう今後の電算システムに盛り込む機能を検討する」とも記している。Ⅱ令和４年度事業報告　第６の３　県立図書館の再編準備では「県内最後の１冊保存体制の検討について、国内の先行事例等を分析し、調査項目の検討を進めた。」としている。2029 年度新館開館予定に向け注目していきたい。

福井

『福井県立図書館年報令和４年度（令和３年度事業実績）』（2022 年６月発行）の「令和４年度運営基本方針」中の「令和４年度 取組

と達成目標」で「他機関との連携」は挑戦事項として「県下で残すべき資料の県立図書館での受入計画の作成」をあげていたが、『同令和５年度（令和４年度事業実績）』（2023 年９月発行）の同項は「若年層への読書活動推進」となっている。ホームページで確認できる過去の令和２（2020）年度から文言は異なるが、同様の内容が記されてきたが、その成果はホームページ上では確認できなかった。

静岡

２０２７年度後半に開館予定の「新県立中央館図書館基本計画　令和２年８月改定」が公表されている。その資料保存方針に、「県内図書館で所蔵できなくなった資料のうち、県立図書館として保存の必要性を認めた資料については、将来にわたる知識へのアクセスを考慮し、可能な範囲で受入を検討する」としている。

新県立中央図書館基本計画に関する一般県民及び市町の意見と、それに対する対応（2019 年に実施だが、今回調査で見つけた）意見募集期間　平成 30 年 12 月から平成 31 年１月、募集結果　294 件（内訳：75 人、１団体）。応募意見に資料保存方針 についての意見「県内図書館の負担を減らし、県全体としての保存機能を向上させるため、デポジットライブラリー機能を持たせる」があり、県の考え方として前述のように「県内図書館で所蔵できなくなった資料のうち、県立図書館として保存の必要性を認めた資料について」「可能な範囲での受入を検討する」としている。

４　まとめ

市町村立図書館の廃棄図書を「県」の判断で受入を行っているのは、北海道、富山、愛知、三重、滋賀、京都、岡山で、分担保存は埼玉。実施している「県」では多摩地域で使われているＴＡＭＡＬＡＳと同様なシステムが有効ではないか。

新館計画のある「県」の内、「県」内図書館の除籍資料への対応について千葉、静岡では運営計画等で言及。また、宮城、福島、福井で取り上げているが、実績は確認できず、福井は２０２３年度で別の事柄に差し替えている。

新館計画で実施されなかった高知、長崎。課題として記載があった奈良。収集方針に記載のある広島、福岡。

実施は８「県」だが、計画にあっても実施に至らない、確認できないが課題としているのを合わせれば、18「県」となり、問題意識が広がっている。

多摩デポは今後も、今回把握した現状を見据え、共同保存の仕組みづくりに取り組んでいく。

多摩地域公立図書館大会での発表の報告

中川理事と吉本氏の講演

東京都市町村立図書館長協議会（以下、「館長会」）が主催する令和５年度多摩地域公立図書館大会が、図書館職員や市民が参加し、２月６～８日に東村山市立中央公民館で開催されました。７日の第４分科会は、「市町村立図書館におけるＴＡＭＡＬＡＳ活用の可能性」と題し、多摩デポ理事の中川と、㈱カーリルの吉

本龍司代表が講師となり、43人の参加者に発表しました。1月末の『通信』前号でご案内していたことですが、結果を報告します。

館長会と多摩デポの経緯

中川は、経験の浅い職員や市民も参加する会なので、まず２００１年以降の多摩地域の図書館での除籍資料の扱い・取組みの経緯と多摩デポ発足から始め、ＴＡＭＡＬＡＳ（多摩地域公共図書館所蔵確認システム）と現場への普及・浸透について説明しました。

東京都立図書館での「都立図書館のあり方検討委員会報告」後の14万冊の大量除籍の話から始め、館長会が除籍の撤回を求めたがかなわず、町田市立図書館が（多摩地域での共同利用のため）都立の５万冊の除籍資料を引き受けたこと。その資料の館長会での扱いの検討、多摩地域で希少なタイトルは２冊まで分担保存する方針が共有されていったこと。各市職員とボランティアが武蔵野市の廃校に集まっての現物選り分け、希少資料を割り当て受け入れるための各市への移送、印刷した丸い保存シールの貼付。一連の作業を通じての共同意識の醸成。

こうして多摩地域の共同保存が進んできたこと。シール貼付資料も近年になって実用書は各市の判断での除籍を認めた経緯、それに伴う新たな資料除籍ガイドライン作成など、多摩地域の共同保存をめぐる約20年を振り返りました。

ＴＡＭＡＬＡＳ一括処理システムの実演

ＴＡＭＡＬＡＳの個別検索システムは除籍作業に充分に活用されていますが、一括処理システムは多摩地域の３分の１の自治体しかＩＤの請求・発行がなく、普及はまだ道半ばです。

一括処理システムは、府中市立図書館の自動出納書庫に入った４～50万冊の点検に使われたように、とても大規模な一括作業ができます。ただし最初の印象で、非日常的なツールとも思われているようです。

だが書架４段、１５０冊程度の点検にも有効な小回りが利く手段でもあります。それを会場で実演しました。中川の個人蔵の蒸気機関車の本１５０点リストのデータを壇上のパソコンから一括処理システムに送り、結果が出るのに要した時間は約９分。活用の幅は広いので、各図書館の現場でいろいろ工夫して使ってほしいと紹介しました。この講演は多摩デポ実践講座（第４回）を兼ねました。

館長会への提案・反響など

締めくくりに、本来は都内全体でのリアルな共同保存体制作りを目指すべき。館長会と多摩デポは連携し、都立図書館を巻き込んで都内全体の共同保存の実現を目指す方向に向かうべきことを発言しました。

経過を知る参加者からは「かつての都立図書館の動きやその後の館長会の対応が整理されていた。多摩デポがあるのも、講演で振り返ったような動きがあったからと改めて思った」との感想が聞かれました。しかし初めての人には盛り沢山過ぎる？内容だったかもしれません。

参加者には「ＴＡＭＡＬＡＳを自分のスマホやパソコンで試してみてください」と使い方や操作を書いた資料を配りました（要旨は前号『通信』に掲載）。先日、参加していた市民に街

で会ったら、「ホントに一発で所蔵の市が分かるんですね」と感心されました。

吉本氏の講演

吉本氏からは「ＡＩ時代の資料保存を考える／ＴＡＭＡＬＡＳの可能性」と題し、多摩デポと協定を結んだ経緯、ＴＡＭＡＬＡＳができるまで、技術的な仕組み、生成ＡＩと公共図書館、利用者の図書館への要求の変化や新しい課題、新たな「図書館の自由」の問題、ＡＩ時代の資料保存、などの発表がありました。

彼の話は最近の図書館事業に寄り添いつつ、貴重な示唆にも富んだ外部からの発言です。中川とセットでは時間が足りず、いつもながらちょっと気の毒でした。

（事務局　Ｗ）

第1回多摩地域ライブラリアン講座が修了

昨年9月に開講し、10名が受講した講座が3月25日の修了式で終わりました。この日は外部講師が3人もおいでになり、ホテル見学やティーパーティの懇親会もありました。

講座の構成は、9人の講師作成の講義の配信による視聴と課題提出。提出課題を講師がフォローするＺＯＯＭ講義。受講生をグループ分けし、自館で行う新たな事業企画を練り上げるワークショップ、作成した企画の発表会、修了レポートの執筆・提出でした。

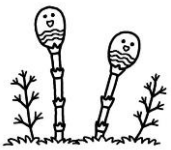
前号『通信』の報告以後には、1月22日と29日にＺＯＯＭで追加講義と事業企画の発表会がありました。所属図書館のサービスの現状と課題を踏まえ提案したそれぞれの企画は、新鮮で説得力もありました。発表後、企画を文章にする修了レポートの執筆。提出されたレポートの講師による審査があり、9名合格、未提出1名が不合格でした。

終了後のアンケートでは、「たくさんの講義を受講させていただき、大変ありがたかった。講義も資料も充実していた」「受講料が少額にかかわらず充実した内容で、先生方のフォローも適切だった」「勉強になることも多く、参加してよかった」「Google Classroom の利用は初めてだったが事務局のフォローで戸惑うことはなかった」「ぜひ2回、3回と続けてほしい」など、おおむね好評でした。

一方、「講座のターゲットやボリューム感を事前に伝えてほしい」「聴講生のようにスポットで参加できる仕組みがあると良い」「参加費が自費、オンライン授業に参加の際も有給休暇だった。市の研修扱いになるよう働きかけてほしい」「映像で一部音声が乱れる講義があった」など、課題となる意見も寄せられました。

初めてでしたが、講座で、接点の少ない個々の現役職員とつながりができ、ワークショップ等で密なコミュニケーションを持つことができました。多摩地域の公共図書館の歴史や全国に与えた影響、多摩デポの考えていることやこれまでの活動も伝えられました。

様々な講師による図書館の新たな動きや考えに接する講義は、職員としてのモティベーションを高めることにもなったのではないか。宿題は多いが、次回を続けたいと思える講座でした。



府中市立図書館の目録のISBN未記載データへの機械的推定とその検証

―児童書の作業が終わる

ISBN（国際標準図書番号）が未記載な図書館の目録に、㈱カーリルが用意した書誌情報のビッグデータからISBNを機械的に推定し、推定された情報が正しいかを人力で検証する研究を続けてきた。1980年から90年代の、日本の出版界にISBNが導入され始めた頃の図書館の目録には、ISBNが記載されているかは不揃いである。ISBNが分かり目録に追加（遡及入力）していければTAMALASが使える領域が広がり、共同保存の精度が増していける。

府中市立図書館の協力で、同館でISBNが未記載な目録にISBNを推定し報告する（同館では確認の上、目録にISBN情報を追加付与）。継続してそれを行い、機械的推定が可能なことを確かめ、精度向上を研究してきた。2023年度は地域資料と児童書で行った。

児童書は、会員を中心にボランティア募集し10名に参加してもらい、8名の事務局員と行った。昨年9月から始め、結果は2月10日に同館に報告した。対象の830件のうち、機械的推定で約80%の精度で正しいISBNを見つけられた。

▲機械的推定で誤同定になった理由の傾向

- セットISBN（全集全巻に同ISBNが付与されていた）の問題
- 複数ISBN（一つの書誌に、複数のISBNが付与されていた）の問題
- 同一シリーズ本の別タイトルのISBNがヒット
- タイトルが同じだが出版社等が違う
- 版違い、出版年違い
- 類似のタイトルを誤同定

▲作業で印象的だったのは以下のようなこと

- 児童書は初期の電算目録では「書誌割れ」が多い。書誌統合するべき
- 国立国会図書館の書誌を確認手段の一つと考えていたが同館でISBN未記載のものが散見された（同館は図書の現物からデータを入力しており、現物にISBNが印刷されてないと考えられる）
- しかし同館の書誌にも記載の誤りがあることが分かってきた

府中市立図書館では報告した情報を点検し目録の充実を図っているはずである。

多摩デポでは、作業に参加してくれたボランティアの方との事後の意見交換会が今の宿題です。

▼回覧で「通信」をご覧の職員の方、どうか会員になってくれませんか？

▼会費納入のお願い

新年度を迎え会費を納入していただくため会員の方には、ゆうちょ銀行の振込票を同封しています。多摩デポの活動は皆様からの会費を基本に成り立っています。よろしくお願いします。

★会の現勢

2024年4月1日現在

●正会員
（個人　81名）
（団体　2団体）

●賛助会員
（個人　26名）
（団体　2団体）

●年会費
正会員　五千円
賛助会員一口二千円